

# ♪ 日展ニュース

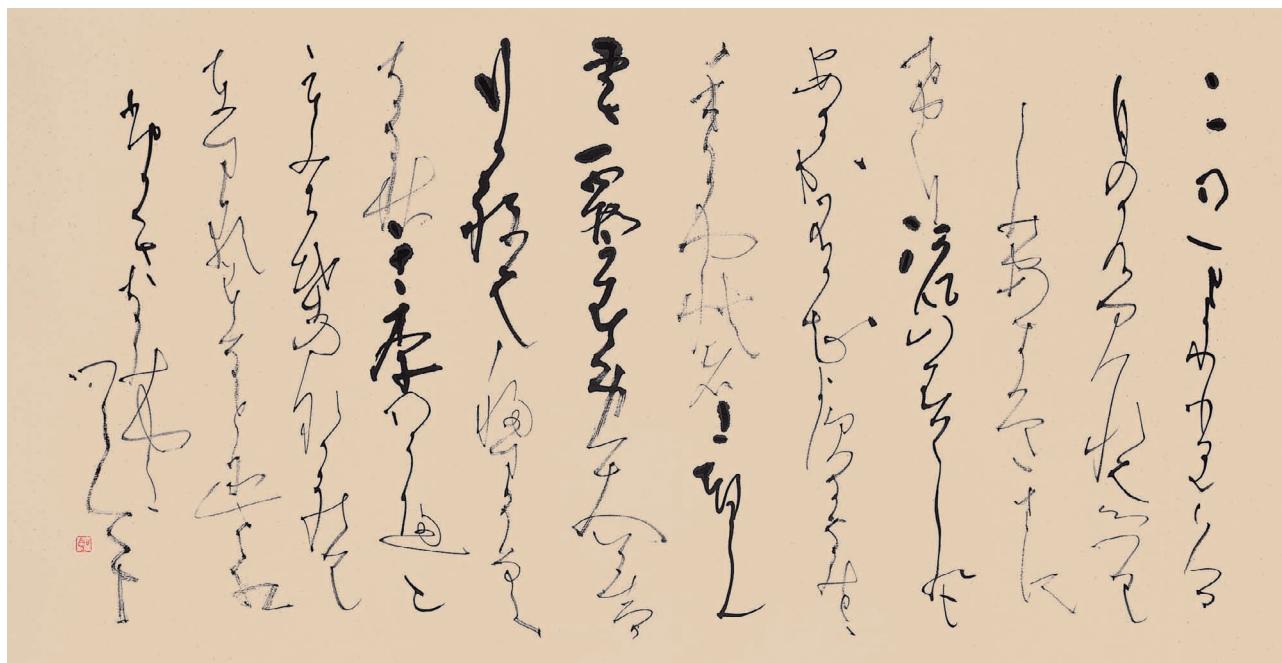
No. 175

<http://www.nitten.or.jp/>

令和2年7月31日発行

編集兼発行人 土屋 禮一

## 第84回 定時総会



古今和歌集抄 高木聖鶴

## 日展理事長に就任して

奥 田 小由女



先般日展では、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う美術館休館等の影響により、巡回展の大坂会場は途中美術館、安曇野、金沢、長崎の各会場は中止に追い込まれました。この非常事態の中、現体制で乗り切るよう、この投票結果によつて理事長再任の重責をお受けいたしました。日展作家の命を守る事、芸術文化の灯を絶やさない為、心を合わせ助け合い前進してゆき、素晴らしい日展の開催を祈念致しております。

## 日展副理事長・事務局長に就任して 土 屋 禮 一



此の度、日展事務局長の重責を改めて仰せつかりました。私自身を育てていただいたこの日展と云う土壤が少しでも豊かなものになるよう、私達の未来でもある、若き作家の信頼を失わない組織であるよう、粘り強く尽くしたいと思っております。皆様の御支援を心からお願いいたします。

## 日展副理事長退任に際して 藤 森 兼 明



一度目の副理事長を二年務めさせていただきこの度、退任いたしました。日展にとつて激動の七年の現場に在任し、内から見える日展、外から見られる日展と大変貴重な体験をさせていただきました。今後共日展の一員として広い視野でお役に立てます様、微力ながら努力して参ります。

## 日展副理事長退任に際して 井 茂 圭 洞



光榮なことに伝統ある日展の副理事長を四年間務めさせて頂きました。その間日展の改革と発展のために微力ながら尽力いたしましたが、これは会員の皆さまの絶大なるご声援とご協力の賜物とありがたく存じております。今後は歴史のある日展が隆盛を極めるために、会員の方々と共に努力して参りたいと念じております。

## 日展副理事長退任に際して

加 藤 種 男



公益法人としての改革は達成されており、この点はささやかながらも役目を果たせたのかと思い、感謝申し上げます。一方で「経営改革による日展の新たな飛躍」には十分寄与できず、心残りです。皆様のご活躍をお祈り申し上げます。

## 日展副理事長に就任して 根 岸 右 司



この度、図らずも日展副理事長の重責を仰せつかりました。今コロナ禍のことで不安が社会を覆い、その現実の中で他の課題と併せ日展運営の真価が問われています。道筋を立てながら更に魅力ある日展を目指し、微力ながら全力を尽してまいります。会員の皆さまの更なる御指導、御支援を切にお願い申し上げます。

## 日展副理事長に就任して 神 戸 峰 男



この度、理事会におきまして、副理事長を拝命いたしました。前期に引き続き、二期目の就任となり、身の引き締まる思いです。先人たちの功績をふまえ、日展全体を盛り上げ、活気ある公益法人としての在りようを模索するとともに、新たな展開を見据え、充実した二年になるよう尽力する所存です。今後とも皆様のご支援をお願い申し上げます。

## 日展副理事長に就任して 黒 田 賢 一



この度、思いもかけず日展副理事長という大任を頂きました。責務の重要性を痛感いたしております。一二三年の伝統の上に改革が進められてきた日展。五科が協調し合いながらより充実し魅力あるものにしていくため、少しでもお役に立てるよう努めて参る所存です。会員の皆様のご指導ご協力をよろしくお願い申し上げます。

# 第84回 定時総会報告

日 時 令和二年六月二十五日

令和二年  
午後二時

出席場所　ホテルグランドパレス  
四九五名（含議決権行使書）  
ダイヤモンドルーム

奥田理事長が議長となり、左記の事項について報告、説明し承認可決した。

(一) 令和元年度事業報告承認について  
(二) 令和元年度決算承認について  
(三) 令和二年度事業計画書報告について  
(四) 令和二年度収支予算書等報告について  
(五) 会員人事報告について  
(六) 選定顧問報告について  
(七) 理事・監事の改選承認について

3 1 その他の報告事項  
2 1 会友規則の一部変更報告について  
2 2 令和二年度称号授与予定者  
3 報告について  
改組新第六回日展巡回展開催  
報告について他

新顧問 役員・会員新人事 令和二年六月二十五日付

新顧問 洋画 中山忠彦 藤森 兼明

理事

副理事長	事務局長	土屋	禮一
副理事長	根岸	右司	
副理事長	神戸	峰男	
副理事長	黒田	賢一	

(○は理事長 ◇は副理事長)

洋	村居	土屋
渡辺	西	山本
斎藤	瀬戸	神戸
小灘	刻	峰男
湯山	俊久	眞輔
一紀	秀夫	富之
信喜	久	輔
正之	俊	峰
禮一	久	之
山崎	佐藤	能島
福田	根岸	田
隆夫	右司	朝彦
千惠	哲	征二
福田	佐藤	山田

工芸美術

新会員

令和二年三月二十五日開催の理事会において、左記二十一名が選出された。

令和二年四月一日付

外	新井	書	○ 奥田小由女
部	黒田	吉賀	春山 文典
星	光風	將夫	武腰 敏昭
部	賢一		三田村有純
元	弘道		高木 圭洞
召			聖雨
河			井茂
野			木下
元			三木
召			喜代
河			喜代
野			喜代

日本画  
伊東  
川嶋  
正次  
涉  
稻田亞紀子  
松浦  
丈子

大竹正治 岡本猛  
西谷之男 松野行

小関良太  
雕刻

二塚佳永子  
宮坂 慎司

工芸美術  
安藤タツ子

浅井  
啓介

書伊藤仙遊泰鵬劉石新谷吉澤

河西 樸堂 野田 正行



書 安藤タヅ子  
工芸美術 竹森公男  
伊藤仙游  
新谷泰鵬  
吉澤劉石  
河西野田  
樺堂正行  
浅井啓介

新準会員

令和二年三月二十五日開催の理事会において、左記一八名が選出された。

令和二年四月一日付

第一科 日本画（三名）

大嶋多実穂  
新川美湖

第一科 洋画(二名)

一の瀬 洋 河本 昭政

第三科 彫 刻 (四名)

岡本和弘 屋田光章  
長田一成 田中昌二

## 第四科 工芸美術（六名）

兼先 恵子 川口 満  
本間 十二町 薫 田中 貴司  
秀昭 向山伊保江

第一科 日本画 (四〇名)

安住小百合  
安藤

第五科書（三名）

池田 仁毓  
岡本 石藍  
大藏 金子

この規則変更により、令和二年三月二十五日開催の理事会において、左記四四三名が選出された。

(1) 昭和33年以降、日本美術展覽会(以下「展覽会」という)において特選を受賞した者  
昭和33年以降、展覽会において8回以上の入選を経た者

令和元年七月二十五日開催の理事会において会友規則の一部変更(会友資格取得の要件を「入選10回」から「入選8回」に変更)を承認した。

第三科 彫刻 (一八名)

中富寺谷竹高瀬鈴清斎興小木神太小梅植市荒木青山  
 村田島口川橋尾木水藤枠池村尾田田山川石猪俣上久  
 忠利良欣幸千輝幹頼宜信正和く佳博美帆英ミ子祐子  
 慎志男孝秀一代男夫子伸子和子み藍洋子一子基子工芸美術 (六十五名)

第四科 工芸美術 (六十五名)

長中富辻竹竹高鈴正澤近小北川金大小氏宇石池井天谷五十嵐理彩  
 尾村澤花内木木和田藤林嶋本井谷澤家邊野未見理彩  
 一厚利宏美彩義朗達卓洋裕ゑ大桂正香香満絹江次  
 正子男美子剛子之実子浪子子輔子和美江秀次

第五科 書 (一九九名)

川片加大大大大尾惠氏上宇岩今出石池伊井井浅秋赤安  
 代山藤山平田澤河崎谷田野多脇井田田藤出上野山澤積  
 久美清欄麗汀 梢紫木錦照逸青佐仙塘朴光小琴南鈴千寧九  
 子洲遂泉華亘光流堂繡陽畔莎雅童霞洞遊游泉海秀華生齡

第六科 書 (一九九名)

川亀我恩大大大遠内植上卯岩磯石池伊井井浅秋青谷  
 西山部田森橋田河門藤山森田中谷惠香智  
 美佐玉静湖永鵬節光慶寒克大美代翠曉春雅龍佐邦峻貞祥  
 智江萩月仙佳雨子熙光山昌愚子子茗風汀一州子子卿治泉

第七科 書 (一九九名)

寺露経調辰竹高高田田田田田田田田田田田田田田  
 尾崎澤子林本山橋桑村ノ中頭木木内藤田谷崎田本藤藤佐々木  
 桑玄菁美法大松雅嚴秋大豊昭庸史皓惠小峰玲月由真芳紅江久玲菱明健芝晶研石  
 林峯汀子子鶴雨風海雄香子生鳳雪里攝花華華朗澄越濤南雄風花香堂青石

第八科 書 (一九九名)

戸寺坪津谷武瀧高高田田田炭鈴杉末下島芝三酒坂佐佐  
 村尾井久口村谷橋野木村中中谷木山吉川田野箇井元貫久  
 舟碩華智和榮登江清紅彰夕光春翔玉舞蒼香美清幸紫省寿泉紫玉洋烟玉岐咸葉鵬  
 里雲泉美光子希東玄舟規綏穗香雲秀舟田岫邨暉子香風裕涯石川人雨秋香集月心

第九科 書 (一九九名)

渡吉山山山安八森森本麦光水松松真本細舟藤藤福福福不橈原原八西丹南長中中東  
 辺澤本本口内信尋津川浪倉枝戸本浦崎波田引森井本富島井動口田 田方羽條沼村田岡海  
 史百翠太筑晃香香 漱竹実靜翠旭靜合螢攝棲晴遙大草朱玲輝青佑紫伯滿登純春硯龍暢藤志美  
 波雅崖一苑楓綠玉仙代枝江翠琴子郊葉亭美香節香鳳茜子藍南水禹子雲晴蘭影雲子葩織風

第十科 書 (一九九名)

吉山山山山柳安八森森村向水三松町眞堀細藤藤福福福福福平桧原原西新仁滑中中藤  
 田本本田川沢河島田上上井野宅尾田喜田川原巻山永田井井位垣沢 村田科志家西嶋  
 満内屋かか多田  
 昌理秦博昌翠弘芝草洋千京峯教無景華泰石郁昭大美明佑淳よ伸游詠雅梨惠方寛柳和茜  
 美子鼎道泉明子瑤藍光砂子翠之雙雲泉彦圃代二轟泉代香哉子子古子舟香椒蕊子邨子女

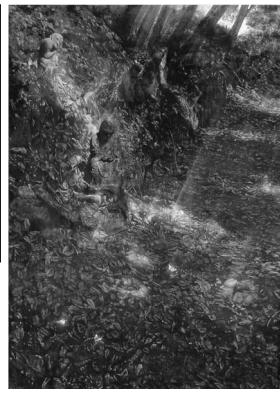




《凍》 川嶋 渉

コロナ禍後、今まで普通にあった価値観が大きく変わろうとしている。  
古い体質の企業や業態が市場から撤退して、新しい形に取って変わる。  
「新」日展と自分自身の今後へ、不安とそれ以上の希望を抱いていきたい。

日本画 伊東正次



《野仏図～陽だまりの戯れ～》  
伊東正次

ご挨拶申し上げます

新会員より

日展の魅力は五科から成る所です。これまでジャンルの違う先生方のご意見を賜り、大変刺激を受けて参りました。

新会員になったこれからも、専門性を横断する交流をより深め、精進して参る所存です。

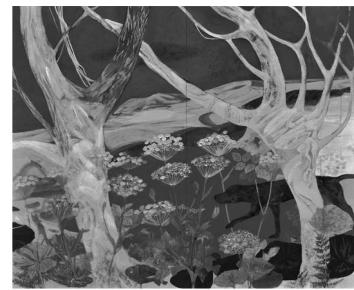
日本画 川嶋 渉



《讃歌》 松浦丈子

私にとって自然は無限で美しく、それを表現する為の感性をより以上に磨かなければと、日展会員にご承認頂けた今、改めて緊張しております。今後ともご指導ご鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。

日本画 松浦丈子



《シシウド野》 稲田亜紀子

作品図版  
改組 新 第6回日展会員作品  
2019（令和元年）

この度は新会員となり身の引き締まる思いです。  
本年はコロナの影響により、足を運べない場所や会えない人々を想う機会が増えました。  
多くの縁に支えられ、美術と関わりながら生きていられる今に感謝しています。

日本画 稲田亜紀子



《景》 大竹正治

日展に出品し始めて、ようやく仲間になれた思いです。又、気を引き締めていかなければと自分に言い聞かせております。ここ2、3年私的に大きな節目がありましたが、前向きに良い仕事をしていきたいと思います。

洋画 大竹正治



《生命》 岡本 猛



《夏の池畔》 西谷之男

百年を越える日展という大河の流れに身を置き、改めて先人の偉しさと自分の矮小さを感じている。今はただ、先人に学びながら、小さき者なりに自分の絵を描き続けていくばかりである。

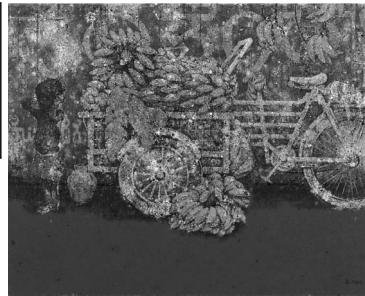
洋画 岡本 猛

歴史ある日展の一員となり、身の引き締まる思いでいます。これからも自然の魅力と取り組みながら研鑽を続け、日展会員の名に恥じないように精進して参りたいと思います。よろしくお願い申し上げます。

洋画 西谷之男

心に響くような絵を描きたい。多くの良き師や仲間に恵まれ、今日があることに深く感謝しています。伝統の重みをしっかりと受け止め、更なる作品の向上と日展の発展に微力ながら寄与できるよう精進してまいります。

洋画 松野 行



《渴き》 松野 行



《プロメテウスの解放》  
高野眞吾

この度は、日展会員の栄誉を賜り感謝致します。今後も作品制作の喜びをかみしめながら、さらに誠心誠意精進を重ねてまいります。ご指導ご鞭撻賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

彫刻 小関良太



《みちゆき》 小関良太

これまで日本美術の中で日展の果たしてきた功績は大きいと感じています。組織の一員となった今、日展の名に恥じぬよう日々研鑽を重ねたいと思います。今後、この伝統を継承しつつ未来へ発展できるよう努力していく所存です。

彫刻 高野眞吾

日展に新会員として加われました事、皆様のお陰様と感謝致します。コロナ禍で新たな日常生活の中、不安を感じる日々となりましたが、少しでも穏やかな時を感じられる作品を制作出来るよう精進して参ります。

彫刻 二塚佳永子



《とん・とん・とん》  
二塚佳永子



《singing shell-II》  
宮坂慎司

近代から時代を越えて彫刻文化を育んできた日展。その一員として次代に向けて何ができるのか、自分に問い合わせていきたい。恩師や先輩が示してくれた「かたち」に対する責任を、自身も彫刻家として追求していきたい。

彫刻 宮坂慎司



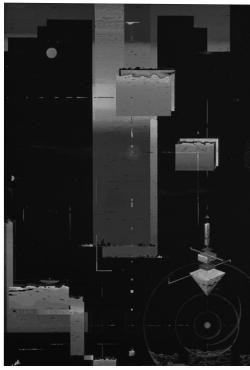
《最後の唄》 前芝武史



《帰想》 安藤タツ子

日展初入選が一度目。そして今は二度目のスタートラインに立った心境です。新しい明日の日展を担うべき、若い作家の力を引き出せる自分の力量を培いながら、今後の作品の制作に責任を持って臨みたいと思います。

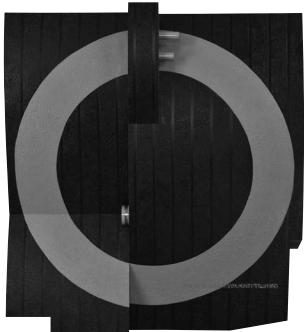
工芸美術 安藤タツ子



《天月地黄昏》 竹森公男

この歴史ある日展、新会員。より一層真摯に作品制作に取り組まなければならぬと、心に強く思いました。そして、いつも創造的な美に挑戦し続けることを肝に銘じ、作品を出品し続けていく所存でございます。

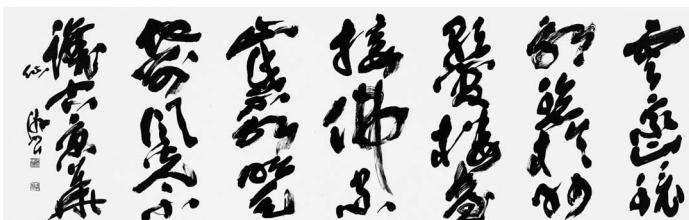
工芸美術 浅井啓介



《円窓VI》 浅井啓介

会員の委嘱を賜り、まことに光栄に存じ上げます。混沌の時代、日常の美しいと感ずる瞬間や事象を大切に、安寧を祈りながら自分の象で表せるよう、一つ一つ積み重ねてまいりたいと思います。

工芸美術 竹森公男



《高山雑詩》 伊藤仙游

日展会員にご推挙頂き歓びに溢れると共に、その責務の重大さに身の引き締まる思いです。常に書の古典と対峙しながら独自の書美を求めて、また書の美を広汎に理解頂けるように、更なる研鑽に努めたいと存じます。

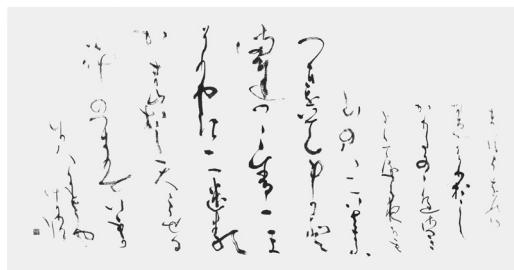
書 伊藤仙游



《順彼長道》 河西樸堂

会員という身に余る立場にご推挙いただきまして、甚だ恐縮しています。初心に返り、よく箕裘を紹ぐべく着実に歩を進めてゆきたいと思います。

書 河西樸堂



《月夜（つくよ）》 吉澤劉石

日展への憧れや思いは書を志した時から持ち合っていました。現在は「作家として常に作品に責任を持たなくてはならない」とさらに自分自身に言い聞かせ、日々古典に目を向けた研鑽に努めているところです。

書 吉澤劉石



《萬葉歌》 新谷泰鵬

此の度、日展の会員に承認していただき、書を志してからの60年を振り返りながらその意味の重大さをひしひしと感じています。今後は、会員に相応しい仕事が出来る様、一層の精進をせねばと肝に銘じております。

書 新谷泰鵬



《りんだうの花》 野田正行

日展は、日本芸術の展開に大きな役割を担っていますし、誰もが認める最高峰の展覧会です。この会員になされましたことの職責を考えますと身の引締まる思いです。更に鍛錬を積み、より良き作品制作に励みたく存じます。

書 野田正行

## 地方だからこそ持てる制作世界

(日本画) 佐 藤 和歌子



これまで地方から出品を続けてきて感じることは変わりらず、地方にいると、どのように評価していくだけ

るかわからぬい不安があり、だからこそより充実した作品づくりをしなければ、といふ思いが以前からありました。そのモチベーションをいかなる場合にも持ち続けること

が、これからも地方で描き続けていく上で必要なことだと思います。

制作しやすい環境さえあれば、都会との差はほとんどないようになります。但し、その地域にしかないものがたくさんあって、それが生活の基盤であり、私たちの感性の根底にあるものだと思うようになってきました。それを含めて、それぞれの地方にそれぞれの制作世界があればいいなと思います。

新型コロナウイルス感染拡大により、展覧会が次々と開催中止または延期となり非常に残念なことではあります、この時期にこそ、ただ無為に過ごすのではなくしっかりと心に留め、次の作品づくりへ繋げていきたいと思います。

(熊本県在住)

## 各地からの

## 感謝

(洋画) 内 海 洋 江

いつも「出品者の思い」を読ませて頂き、各地で同じ思いで頑張つておられる方々の人生や日常生活に触れて、多くのことを学び、励みにさせて頂いております。

私は高校生の頃、絵の道に入り、幸運にも良き師と多くの先輩方、仲間に恵まれ、ご指導頂きました。また今まで大好きな絵を続けることが出来ましたのは、八十九歳になる母が家事を担つてくれるなど、家族の協力があってこそだと、ただただ支えて下さった方々への感謝の気持ちでいっぱいです。

日展の巡回展がふくやま美術館で開催されたのは十年くらい前ですが、公募展を観る機会の少ない地域だったので、当時は大きな話題になりました。この時ばかりは、地元の人たちに観てもらえる、絵を描き続けて良かったと感慨深いものがありました。感謝、ありがとうございます。

日展に出品を始めた二十代は、植物や風景を描き、その過程で湧き上がるイメージを構想し制作を続ける日々でした。が、次第に完成した作品に物足りなさを感じ、表現の内容や形態に試行錯誤を繰り返しながら制作しております。先の見えない私のチャレンジを温かく見守つて下さった先生方、先輩方の何げないアドバイスが道標となり歩を進めることが出来ました。

「浮き沈みの中でも続けていけば、見えなかつた世界が見えて来る節目がある。その時の発見を重ねて己の思考の世界を



## 心の糧

(工芸美術) 兼先 恵子



これまで地方から出品を続けてきて感じることは変わりらず、地方にいると、どのように評価していくだけ

るかわからぬい不安があり、だからこそより充実した作品づくりをしなければ、といふ思いが以前からありました。そのモチベーションをいかなる場合にも持ち続けること

が、これからも地方で描き続けていく上で必要なことだと思います。

制作しやすい環境さえあれば、都会との差はほとんどないようになります。但し、その地域にしかないものがたくさんあって、それが生活の基盤であり、私たちの感性の根底にあるものだと思うようになってきました。それを含めて、それぞれの地方にそれぞれの制作世界があればいいなと思います。

新型コロナウイルス感染拡大により、展覧会が次々と開催中止または延期となり非常に残念なことではあります、この時期にこそ、ただ無為に過ごすのではなくしっかりと心に留め、次の作品づくりへ繋げていきたいと思

## 汗と安堵の搬入道中

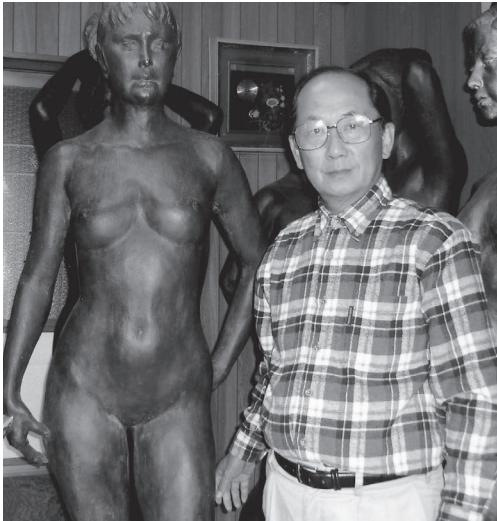
(彫刻) 鈴木徹男

水戸は上野からJR特急列車で一時間余りのところにあります。駅からさらに東に向けて二十分ほど車を走らせると我家に着きます。自宅周辺は丘陵の先端部に位置していて、かつて目の前は海だったようです。近くには常陸風土記に記された国指定史跡の『大串貝塚』が公園として整備保存されています。園内には縄文時代の復元住居や巨人展望像があり、像に登ると広大な水田地帯が望めます。

私は数年前まで、日展への搬入をマイカーで行つておりました。地元の先生方に道案内を頂き、車列を整えて首都高速を走りました。幾つものジャンクションに戸惑いながら、必死になつて先導車について行つたものです。そして、外苑出口で高速を降り六本木の美術館通用口に入るや否や、どつと一年の疲れと安堵の汗が出るのでした。日展作品の搬入搬出は私にとって毎年最後の大仕事でした。

先生方にはこの様なことまでお世話になり、有難く大変感謝致しております。

(茨城県在住)



## 出品者の思い

### かな書道にめぐりあつて

(書) 津志田沙苑

(京都府在住)

広げなさい。」との恩師の言葉は今も私の制作の糧です。悩み、躊躇、諦めかけた時、この言葉を思い起し、もう少し続けてみようと心を奮い立たせていました。京都という多様な文化を育んだ地は、伝統を守りながらも新しい物を否定しない懐の深さが有り、恵まれた制作環境で仕事を続けられる事を大事に、美しいと思う感性を見失うことなく、染色を通して、最大限表現へと昇華させる努力を続けたいと思っています。



私は岩手県宮古市に生まれ、盛岡市に嫁いで五十年が過ぎました。盛岡は旧南部藩の城下町、秀峰岩手山を望む自然豊かな街です。岩手県は石川啄木や宮沢賢治等秀でた文人が輩出しております。

みちのく岩手に「かな書道」が根付いたのは六十年前、深山龍洞先生方の熱意と行動力で花開いたものです。

私も雅な流麗美に魅せられ、四十代半ばに主婦の趣味として「かな教室」に入門しました。地元の書展から夢の日展へも挑戦し続けましたが、日展初入選は六十歳過ぎでした。私の所属している書道会本部は神戸にありますので、家人の理解協力の支えで研究会等にも参加し学べることは、書作の悩みはあるものの充実の七十代です。

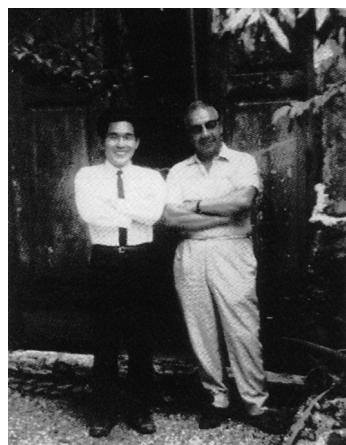
これからは健康に留意し、書友や弟子達と共に「伝統ある日展」に挑戦することで、筆文化継承に繋がると信じております。それが充実した日々に導いてくださった先生方への感謝と考えております。

(岩手県在住)

# 作家人生——私の仕事——

## 転機

第三科彫刻 理事 山本眞輔



Prof. Pericle Fazzini と  
Fazzini アトリエ前にて (1968年)



『心の旅—光の舞—』  
(平成三十年改組新第五回日展出品作)



『心の旅—風に祈りて—』  
(平成二十九年改組新第四回日展出品作)



『心の旅—ヴェネツィア—』  
(平成十二年第三十二回日展出品作)

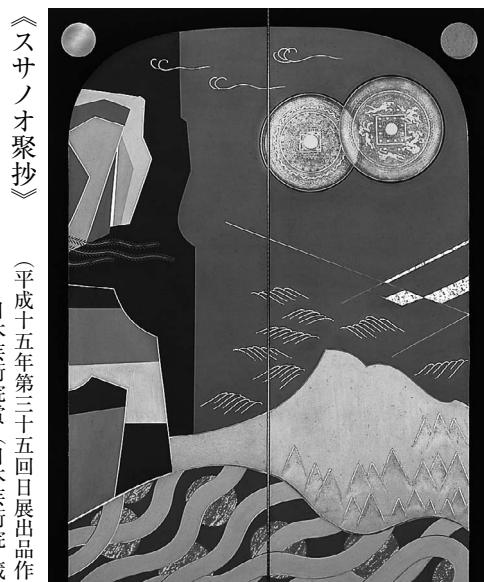
東京教育大学（現・筑波大学）「彫塑」に入学するため石膏デッサンを勉強した。学科試験もあり合格は大きな自信になつた。大学では「塑像制作」がメインであった。裸のモデルを前にしていかに正確に写すことができるかという技術の習得が「彫塑」を究めることだと思っていた。学部を卒業し教育学専攻科「彫塑」（現・大学院）に進学してもモデルを見て正確に写すことが彫刻制作であると思っていた。自分の力がどの程度のものかを知りたいと「日展」第三科に出品し入選したことも私を力づけてくれた。大学専攻科卒業と同時に名古屋市立保育短期大学に「図画工作」「絵画制作」担当の教員として職を得て赴任した。それ以後名古屋を中心として制作活動を続けている。このころ（一九六〇年代）ヨーロッパではマンズー、グレコ、ファッチーニ、ヘンリー・ムーアなどイタリアを中心とした彫塑表現の新しいねりが「古典主義表現」に新しい息吹を吹き込んでいた。このうねりを肌で感じたいと思ったのは私だけではなかつた。日本の作家たちがこぞつてイタリア風に傾いたのはこの頃である。

イタリア語試験に合格、（一九六八／六九）イタリア政府給費留学生としてローマ・アカデミア彫刻科に留学した。アカデミアには「グレコ教室」と「ファッチーニ教室」があり私は「ファッチーニ教室」に入った。そこで目から鱗、私にとつては大きな転機があつた。

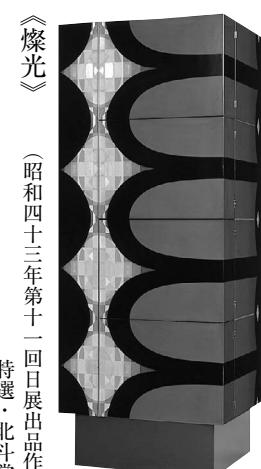
日本でデッサンを勉強、塑像制作基礎訓練もし、日展にも入選したという私の「己惚れ」はファッチーニ先生の一言で大きく崩された。「デッサンをうまく描けなくていい。粘土で人体描写することも必要ない。彫刻は君が何をつくりたいかを考えることだ」当時の自分にとつては大きな転機であった。自分が何を表現したいかという「イメージ」を制作の中心に据える。これが以後の私の仕事の方向を決めてくれている。帰国後も日展に出品し現在に至つてゐる。



《収穫》(昭和58年第15回日展出品作) 日展会員賞



『スサノオ聚抄』  
(平成十五年第三十五回日展出品作)  
日本芸術院賞 (日本芸術院蔵)



『燐光』  
(昭和四十三年第十一回日展出品作)  
特選・北斗賞



漆芸作家集団〔フォルメ〕結成  
前衛活動展開

## 彩漆への道

第四科工芸美術 顧問 伊藤裕司

京美校(京都市立日吉ヶ丘高等学校)を卒業して東京へ出て、昭和二十九年(一九五四年)の春で、先の大戦後の復興も緒に就く前のことです。あの酷い時代に寝食を与えて頂く内弟子として受け入れて下さったのが山崎覚太郎先生とご一家の皆内様でした。そして東京でのその五年間が私の漆芸作家としての門出もありました。当时、先生は塗、蒔絵の伝統の漆芸を脱して、新しい漆の美を求める、従来の箱・棚・器物等を越えて彩漆による制作に新しい漆の活路を求め、大作の平面志向に舵を切られた直後に先生の膝元に飛び込んでいったということです。それまでの緻密な表現に活路を拓かれ、アトリエで先生の指示される彩漆作りに日夜専念する日々を過ごし、"彩漆"が私の感性の内に強烈に浸透していく私のあります。

五年の徒弟生活を辞して京都に戻りました。幸い京都には、番浦省吾先生を始め新しい漆芸の道を求める活動を始めた作家集団"朱玄会"があり入会を許され、その末席で作家人の第一歩を踏み出すこととなり、制作も彩漆をベースに伝統の蒔絵技法や様々な異素材を取り入れるなどして画面作りも多彩になつてきました。

昭和五十二年(一九七七年)秋、朱玄会の作家たちの日展出品作品が審査の結果、予想外の多数の選外という深刻な事態となり、番浦先生を始め全会員が数日真剣な討論を重ねた結果、若い作家たちの肩を切り離して、別の集団を作り、それを認めて支援していくこととなり私がその全権を任せられました。才知秀められた鈴木雅也君を強力な同志として"フォルメ"という集団を結成し、濃密な創作活動を十年余展開して、最後は画廊を一年間使用契約し、各作家の個展シリーズを開催。その後、ある事態に直面して解散も止むないこととなりました。思えば、社会ととの接点を求めてづけた活動は各人がそれぞれの志向のもとに大作を以つて建築空間への装飾美を求めるなど、個々ではなし得ない運動体として、漆の旧態打破の"アバンギャルド"の運動でもありました。

「過去の形に囚われるな、常に新しい創意に自分を賭ける力の漲つた作品を作れ」いまも師の叱咤激励がことある毎に蘇ってきます。

日展ゆかりの  
**美術館 散策**

第17回

全国各地の美術館の中から日展作家ゆかりの美術館を関係者の紹介文を添えて少しづつご案内いたします。是非、日展作家の名作との出会いをお楽しみください。

法樂寺リーヴスギャラリー

**小坂奇石記念館**

リーヴスギャラリー「小坂奇石記念館」は前面が総ガラス張りで、僧侶がかかる網代笠をイメージしたモダンな建物のギャラリーで、人々が手を合わせる合掌の姿を形取ったホール明王殿とに分かれた造りになっている。

小坂先生の作品は日展や公募展に出品された大作をはじめ小品、焼物、染色、またお稽古で書かれた折帖など約四百点余りが収蔵されている。毎年十一月中旬から一ヶ月間、小坂奇石展を開催しているが、今年は小坂奇石生誕百三十年、没後三十年の記念展である。

書家・小坂奇石先生は一九〇一年、徳島県に生まれ、一九九一年に奈良県で没した。その間の一九七八年（七十七歳）までの四十年余りを大阪府東住吉区に居を構えた。法樂寺へは徒歩数分の所である。散歩がてら郵便局への行き帰りに山門をくぐり楠の大木を仰ぎ、しばし思いを巡らせていたようだ。法樂寺の老僧の話によると、当時、若僧だった私に、大楠の前で大樹の成長を人間に例え、若者への篤い思いを語られたり、月参りで先生宅を訪れた時は、床の間にかかる書について話が弾んだことを思い出す、とのことであった。

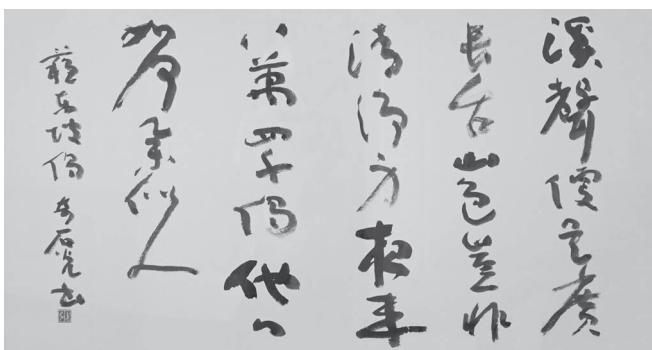
以来昵懃にさせていたご住職との縁で、小坂先生が亡くなり七回忌の時に「小坂奇石記念館」を境内に建立する運びとなり、一九九七年開館に至った。「法樂寺

第五科書 会員 山本 大悦

「私の家のすぐ近くに法樂寺という古刹がある。その昔、慈雲さんは、ここで剃髪修行せられた。寺歴によれば平重盛の創建というから相当に古い。門を入ったところに樹齢八百年の大楠がある。計ったことはないが、四かかえか五かかえぐらいはある。」『書源』（昭和四十六年第五卷八号）巻頭言から引用した小坂先生の文である。

書家・小坂奇石先生は一九〇一年、徳島県に生まれ、一九九一年に奈良県で没した。その間の一九七八年（七十七歳）までの四十年余りを大阪府東住吉区に居を構えた。法樂寺へは徒歩数分の所である。散歩がてら郵便局への行き帰りに山門をくぐり楠の大木を仰ぎ、しばし思いを巡らせていたようだ。法樂寺の老僧の話によると、当時、若僧だった私に、大楠の前で大樹の成長を人間に例え、若者への篤い思いを語られたり、月参りで先生宅を訪れた時は、床の間にかかる書について話が弾んだことを思い出す、とのことであった。

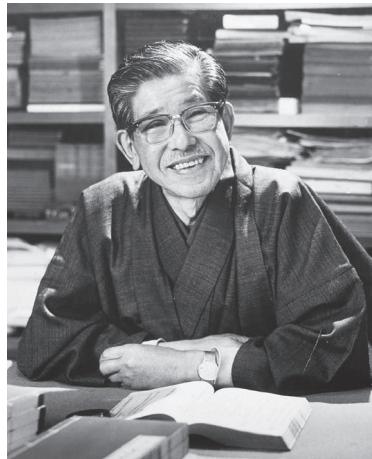
以来昵懃にさせていたご住職との縁で、小坂先生が亡くなり七回忌の時に「小坂奇石記念館」を境内に建立する運びとなり、一九九七年開館に至った。「法樂寺



《蘇東坡 假》（昭和63年第20回日展出品作）



小坂奇石(1901~1991)  
書家  
日展参事



法樂寺リーヴスギャラリー  
**小坂奇石記念館**

〒546-0035

大阪市東住吉区山坂1-18-30

TEL 06(6626)2805

【アクセス】

JR阪和線 南田辺駅より徒歩5分

OsakaMetro谷町線 田辺駅より徒歩8分



